

絵本翻訳の可能性 —言語に対する気づきとグローバルな視点の涵養—

横野 成美

(金沢星稜大学女子短期大学部)

1. はじめに

本報告は、教材として絵本を用いて翻訳することにより、二つの学習効果を意図した活動の報告である。一つ目は、学習者に母語である日本語と英語の違いに意識的に目を向けさせるという言語的な側面である。英語から日本語への翻訳を前段階とし、次に日本語から英語への翻訳を行った。二つ目は、日本語から英語に翻訳された絵本を途上国の NGO に寄贈することにより、自分たちの英語学習が、単に学習に留まらず、その成果により世界と繋がりを持つことで、それをきっかけにグローバルな視点を身に付け学習を深めるといった社会的な側面である。

2. 活動のきっかけ

本学は石川県金沢市に所在する、経営実務科の単科短期大学である。従って必修科目の英語ではビジネス英語を中心にカリキュラムが組まれている。もちろん、就職して職場で英語を実際に使用する必要に迫られる学生も一定数は存在するものの、大多数の学生においては日常生活で英語を使用する機会が頻繁にあるわけではない。とは言え、2019年度末に新型コロナウイルス感染症が広がる以前は、金沢市を訪れる外国人観光客の数は、地方都市としては比較的多く、学生たちも駅や観光地で外国人と接することも多かった。またキャンパスを共にする大学には年間十数名程度の留学生が学び、その学生たちとの交流も図られていた。しかしコロナ禍をきっかけにそのような機会は奪われ、英語を実際に使用する場が減ったことで学生の英語学習への動機が低下したことは想像に難くない。

そこで、学生たちが興味を持って取り組み、その成果が形のあるものとして残り、それによって自分達の英語学習が人の役に立ち、社会と繋がることのできる学習活動と考えた時に思い当たったのが、日本語の絵本を英語に翻訳して途上国の子供達に送る活動であった。今回の実践はゼミに所属する 17 名の 1 年生 (IBA のスコアを基にすると CEFR A1-B2 相当レベル) を対象としたものである。

3. 言語活動としての側面—日本語と英語の認知の違い

岡野 (2012) が翻訳活動の実践から興味深い例を紹介している。岡野は “Good Night, Good Knight” (Shelly Moore Thomas, Jennifer Plecas, Dutton Juvenile, 2000) の冒頭を学生に訳させた。

Once there were three little dragons.

They lived in a dark cave.
 The cave was in a dense forest.
 The forest was in a faraway kingdom.
 The poor little dragons
 were very lonely
 in their deep dark cave.

岡野氏の学生 21 名のうち 17 名はこれを英語の語順通りに句読点通り一文一文忠実に訳したが、残りの 4 名は日本語では広いものから狭いものへと述べていくほうが自然であることから、あえて語順を逆に訳したというのである。英語では a dark cave, a dense forest, a faraway kingdom という順に主役の dragons のいる地点から徐々に視点が広がっていくのに対し、彼らの日本語訳では「ドラゴンは、遠い王国の森の、ずっとずっととおくにある、暗い洞窟でひっそりとくらしていました。」というように視点は大きいほうから小さいほうへと移動する。これは住所を書く際にも日英では語順が逆になっていることを想起させ、帰属意識・世界観の違いとも関係しているとも考えられる。濱田 (2016) によると日英語話者ではモノや出来事の内容を表現する場合に認識の違いが見られる。日本語話者は母語習得の過程で「場面内視点」が慣習となっており、「場所の表現がまず先に言語化され、それを参照点として目標物をたどる」という認識をするのに対し、英語話者は母語習得の過程で「場面外視点」が慣習化し、「出来事の中の何かを Figure として認識し、それを出発点として出来事を述べる」という認識の仕方をする。このように、この例は言語化と認知処理が深く関わっていることを学生に理解させる好例と言える。岡野 (2012) は最後に灰島かり氏により評論社から出版されている訳を紹介し、それがやはり、日本語話者の認知処理と合致した訳になっていることを確認している。このように絵本の翻訳は学生に様々な学びを与えてくれる宝庫といえよう。

4. 絵本翻訳活動

4-1. 英日翻訳

学生たちがこれまで高等学校の授業で行ってきたのは英文読解のための英文和訳であり、翻訳とは異なる。翻訳にあたっては、ただ意味を掴む目的の和訳レベルではなく、他の読者が読んで鑑賞に堪えうる訳文にまでレベルを高める必要がある。絵本の翻訳は語数も少なく、使用されている言葉も平易なことから、一見易しそうに思われるが、実は短い文章ほど翻訳が難しい。準備段階として “I’m hungry.” という一文から始め、日本語では主語が省かれ、語尾で性別・年齢、その他の属性が表出されることを念頭において訳させた。この簡単な一文が「おなかすいた〜」「はらへった」「おなかぺこぺこ」「空腹です」など、何通りもの訳が可能であることに目を向けさせた。また翻訳という活動に興味を持たせ、日本語と英語は必ずしも 1 対 1 の対応関係にないということを理解してもらうため、日本語の言葉（日本に特有の食べ物、事象等は除く）で英語に翻訳できない言葉があると思うかを学生に考えさせた。学生からは「いただきます」「お疲れ様」などの言葉が上がった。

その後「翻訳できない世界のことば」(前田、2016)に掲載された「木漏れ日」「侘び寂び」等のことばを紹介し、言語はそれを使う国民、民族の文化、もののとらえ方、感性と深くつながり切り離せないことについて理解を深めさせた。

翻訳について理解を深めた上で、学生に同じ絵本の冒頭部分を訳させ、グループ内で訳文を話し合わせた後、実際に出版されている翻訳版絵本の日本語と比較させ、プロの絵本翻訳家の工夫から学んだ。最後に17人の学生各自に好きな英語絵本1冊を選ばせ翻訳させた。その時与えた注意事項は以下の通りである。

1. 絵からの情報も読み取る。

文章に直接書いてなくても、絵から読み取れることは多い。例えば登場人物は何歳くらいなのか、またその表情からどのような性格の持ち主なのかを推し量れる。野原(2014)は、絵本の場合、絵は補足的な役割ではなく、登場人物の姿、状況、色彩やタッチによって示される世界感を伝えるのに必要不可欠と述べている。

2. 代名詞(主格・所有格・目的格)は極力訳さない工夫をする。

日本語で2人称代名詞 you を「あなた」と表現することはまれであるし、「彼(の)」「彼女(の)」というような3人称代名詞は極めて翻訳調である。

3. イメージを頭の中で描き語尾で年齢・性別等を表す。

上述したように日本語は語尾でかなりの情報を伝えられる。

4. 漢語でなく大和言葉を使う。

牧野(2018)はある意味内容が訓読みと音読みによって共感性が変わってくるという興味深い説を述べている。例えば「嵐山」(あらしやま)、「甲山」(かぶとやま)のように訓読みになっている山は親近感を抱かれている低い山が多いのに対し、「阿蘇山」(あそさん)、「昭和新山」(しょうわしんざん)等の高く切り立った威厳のある山は音読みが多いと言う。もちろん絵本であるから難しい漢語・漢字は出て来ないが、大和言葉(訓読み)を使うことで、より児童に寄り添った親しみが持てる訳になると考えられる。逆に日本語から英語に翻訳する場合はこの違いは消えてしまう。

5. 語り掛けるように、自分の訳文を何度も声に出してみる

絵本は親や先生等が子供に読み聞かせることも多いため、仕上がった翻訳は朗読会という形で英語、翻訳の双方を披露させた。最後に翻訳について工夫した点、苦労した点についてレポートを書かせた。

4-2. 日英翻訳

この活動においても学生達に自分が翻訳したいと思う本を一人3冊選ばせた。学生達が子供のころ慣れ親しんだ、思い入れのある絵本を翻訳させたいという趣旨であったが、中には古典的名作で、すでに英語版が出版されていることが翻訳後に判明したものもあった。また翻訳後、途上国の NGO に寄贈する際に、著作権の問題で出版社から寄贈の許可が下りなかったものもあり、事前確認しなかったことを後悔した。日英翻訳は、英日翻訳よりかなり難度が上がる。学生の中には CEFR で A1 レベルの学生も混じっており、寄贈するにあたってはある程度の質を担保する必要があるため、学生のアウトプットは全て目を通

し、添削を行う必要があった。絵本なので文章量は少ないとはいえ、51冊の添削指導にはかなりの時間を要した。

学生にとってスピーキングと違い、翻訳の場合は辞書も使え、時間をかけじっくりと取り組むことができる利点はあるが、絵本翻訳独特の以下のような問題がいくつかあり、添削でも特に注意を払った。

1. 主語の選定

英日翻訳においては、主語を訳さない工夫が必要であったが、日英では逆に省略された主語を補って訳さなくてはならない。安藤（1986）によると日本語では主語代名詞が省略されるパターンがいくつかある。まず、談話の当事者（話し手と聞き手）を表す場合、「A: モウ起キタノ B: ウン、モウ起キタ」、次に、先行文に主語が表示されている場合「A: 花子ハ、来ルカシラ。B: モチロン。来ルサ」、そして、場面から指示物がわかる場合「[珍しい果物を見ながら] 食ベラレルノ？」等が挙げられる。学生の訳した本の中の一冊「おべんとう」という絵本は次のように始まり、

「おべんとうばこ よういして
さあて なにからいれようか」（一つずつ具材を入れていき、最後は）
「ほうら できたよ おべんとう
ほらほら とっても おいしそう」と終わる。

日本語としてはごく自然な文であり、一見なんの変哲もない文であるが、英語に翻訳するにあたっては意識して主語を考えないと文が作れない。「誰がおべんとうばこを用意するのか」、「何がとってもおいしそうなのか」等を全て明示しないと英文にならないのである。また日本語には複数形がない（「達」等の表現はあるが、使用しない方が自然な場合が多い）が、絵から判断して、主語が単数か複数かを区別しなければならない。

2. 時制

樋口（2001）は日本語の時制について、「英語の場合の様にその基準時が固定的ではなく、基本的に事態との相対的な位置関係を表し、事態の認知主体やその時間的位置についてはもともとコンテキストで補う仕組みになっている」ものと考えることにより、英語ではいわゆる現在形と考えられる「ル」や「ウ」、「マス」等で終わる基本形と、過去形とみなされる「タ」で終わる形が必ずしも時制を表さないと指摘している。

以下は学生が翻訳に取り組んだ「ぐりとぐらのおきゃくさま」の一部である。

そこでぐりとぐらはこの大きな長靴の跡をつけていきました。足跡は森を抜けて、原っぱを通り、真っ直ぐ落葉樹の林へ向かっています。林の入り口に雪だるまが立っていました。雪だるまの後ろには家が1件あって、煙突から煙が出ています。

足跡はこの家のドアの前で消えていました。

「向かっています」「煙が出ています」と基本形（現在形）を用いることによって、ぐりとぐらの前に広がる光景がまるで彼らが見ているかのような視点で生き生きと語られている。このように基本形と「タ」形が交互に出てきても自然な理由について樋口（2001）は日本語ではコンテキストによる解釈にかなりの部分を委ねることが可能で認知主体やその時間的位置はコンテキストにより解釈されるのに対して、英語では、時制選択基準時は固定的で通常、時制を混ぜて使うことは許されないと指摘している。また牧野（2018）はこの違いを、英語は表現対象と距離を置き客観的に過去時制を使うのに対し、日本語ではある時は主観的になることで時制を使い分けることが可能であると説明している。学生の英語訳は当初、日本語通りそのまま過去形と現在形が混在していたが、過去形に変更した。

3. 擬音語・擬態語

日本語は擬音語・擬態語が他の言語より豊富であるといわれるが、絵本はまさにその宝庫であり、絵本においては擬音語・擬態語が使われていないページはないと言っても過言ではない。灰島（2005）によると英語の擬音語と擬態語をあわせたオノマトペは約 3000 語であるが、日本語のオノマトペはその4倍の 12,000 語あると言われている。牧野（2018）によるとその理由として、自然との強い共存意識を持つため、日本人は自然環境から音を吸収することに強い興味があるためだと述べている。我々日本人が何か感情を込めた描写をしようとする時、オノマトペを使わずには不可能だといっても過言ではないといえよう。従って、英語から日本語に翻訳する際、特に絵本の翻訳においては、原文にオノマトペが無くても、あえて用いることで描写が生き生きとしてきて、子供たちは容易く感情移入ができるようになる。灰島（2005）は Shirley Hughes の *Alfie Gives a Hand* の中の子供たちがシャボン玉で遊ぶ部分の描写 “The Bernard’s Mum brought out some bubble stuff and blew lots of bubbles into the air. They floated all over the garden...” を「ママが庭で、シャボン玉をとばしてくれました。キラキラ、フワフワ（斜字体筆者）、庭中が シャボン玉でいっぱい。」というふうに訳しているが、単に「シャボン玉が庭中に浮かんでいた。」と訳すのでは、想起されるイメージに大きな違いがある。日英翻訳においては、学生たちはこれとは逆方向、すなわち、様々な擬音語・擬態語をその様態を表すような動詞表現等に変換する必要があり、大変苦勞することが予想できた。

そのため、こちらでリストを作り事前によく使われる擬音語・擬態語の翻訳について学習してから実際の翻訳に取り組みさせたのだが、絵本作家の創造性・独創性は予想をはるかに超えるものであり、リストにない表現が次から次へと出てきて、学生たちは四苦八苦した。絵本なので動物もたくさん登場するが、日本語では「鳴く」という動詞に擬音語をつけて動物の鳴き声を表すのが普通であるのに対し、英語では動物により違う動詞が存在することはよく知られている。(ex. 犬「ワンワン鳴く」bark、猫「ニャーと鳴く」meow) ジョーデン（1982）によると英語では鳥や動物の鳴き声を表す動詞は、cackle（めんどり）、crow（おんどり）、gobble（七面鳥）、quack（あひる）、caw（カラス）、hoot（ふくろう）、

honk (がん) のように種類ごとに細かく細分化されているが、種類の異なる虫の鳴き声に関しては chirp という一語で済まされる。これは日本人がそれぞれの虫の鳴き声を「リンリン」「チンチロリン」などと細かく区別するのと対照的であり、言葉と文化的背景が密接に関連していることを示唆している。

学生が翻訳した絵本の1冊である「たまごのあかちゃん」には次々と卵から生まれる赤ちゃんが擬音語とともに紹介される。「ぴっぴっぴ こんにちは にわとりのあかちゃん」、「よちよちよち こんにちは かめのあかちゃん」、「よろよろよろ こんにちは へびのあかちゃん」、「ぴいーぴいーぴいー こんにちは ペんぎんのあかちゃん」「きゅーうきゅーうきゅーう こんにちは きょうりゅうのあかちゃん」学生はこの擬音語の部分をそれぞれ “Cheep, cheep, cheep”, “Toddle, toddle,” “Wriggle, wriggle, wriggle,” “Chirp, chirp, chirp,” “Squeal, squeal, squeal” というように処理した。このうち toddle と wriggle は擬音語ではなく様態を表す自動詞であるが、例えば *The Little Old Lady Who Wasn't Afraid of Anything* の “Behind her she could hear two shoes go, ‘Clomp, Clomp,’ And the pants went ‘Wiggle, Wiggle.’” に見られるように擬音語のように自動詞を2語重ねる用法が見られ、もともとは音表象であった可能性を示唆している。ジョーデン (1982) はこの例として日本語の「くしゃみ」、英語の “sneeze” を挙げている。

また厳密な意味では擬態語とは言えないかもしれないが、日本語ではとても簡単な「あれ あれ あれれ・・・」(子供がおばけを見てびっくりする場面) のような言葉も存外に難しかった。(Oh-oh! What's that? ぐらいが文脈においては適切であろうか)

5. 学生のコメント

当事者である学生たちは絵本翻訳活動をどのように受け止めたのか、いくつかコメントを紹介したい。日英翻訳では全員が一樣に擬音語・擬態語の翻訳に苦労したと述べていたのが印象的であった。

5.1. 英日翻訳

- 人物によって話し方を変えるのに苦労した。書いてあることをそのまま訳すと必ずしもしっくりくる表現になるわけではなく、日本語を考えなければならぬと思いました。
- お母さんとお父さんとお兄ちゃんのセリフの語尾をそれぞれ変えた。同じ文でも言っている人が違うのでどういう表現にすると差が出るか悩んだ。
- 直訳してそのままの文でなく、普通の日本語の文章に自分で直し、更に子供に伝わるような言葉を使うようにすることが難しかった。
- 読み方によって自分達も絵本に引き込まれていくことが出来て、すごく面白いし、英語の絵本をもっと読んでみたいと思いました。弟と妹達に読んだら、大爆笑されて楽しかったです。

5.2. 日英翻訳

- 「もったいないばあさん」を訳している時に発見したことで、私たちは普通に「もったいない」という言葉を使うが、英語には「もったいない」という意味の言葉はなく、「もったいない」という意味に近い言葉しかないことを知った。日本語にはあっても英語にはその意味がない言葉があるということに気づいた。
- 「すっぱーん」が毎回出てくるのですが、適切な翻訳がなかなか見つからず、よく調べました。擬音語を完璧に翻訳することはできないということがわかりました。
- (自分の) 語彙が少ない。単語を調べてもどの単語が意味に合うのか判断が難しかった。日本語と英語では主語と述語などの位置が変わってくるため一苦労だった。
- 子供たちの目線になって、あまり難しい単語を使わないように努力しました。同じ表現が沢山あったので飽きないように少し変えてみたりと工夫をしました。
- この絵本は、視点が誰なのかが分かりにくかったため、一人称を何にするかとても迷った。時制に気を付けて翻訳するのが大変だった。ひとつの単語に複数の翻訳があったためそれぞれどれが最も適しているのかを考えて訳す必要があった。また、子供向けの翻訳にするためにわかりやすい解釈にしたり、翻訳を心がける必要があるとわかった。
- 日本語は「びっくり ひゃっくり」などの言葉遊びのような言い回しが多く、どうしても訳せないものもあった。外国の子供たちにもこういった面白さを伝えたかったが、その難しさを痛感した。
- ケーキやクレープ、ババロアなどはそのまま英単語にできたが、大福など日本独自のものにはぴったりの英単語が存在しなかったこと。英単語のないものは説明のような名称で表記できないこともないこと。
- 日本語の「いないいないばあ」と英語の“peek a boo”はリズムが一緒に翻訳しやすかったです。簡単な日本語を翻訳するのは楽だと思っていたけど、逆に難しいなと感じました。改めて日本語と英語の文法の違いを感じました。少しでも子供たちに分かりやすく伝わるように頑張りました。

6. グローバル教育としての側面

本活動の最終目的は、日本語から英語に翻訳した絵本をフィリピン、セブ島の国際 NGO 団体に寄贈し、スラム街で暮らす公教育を受けていない恵まれない児童達に、絵本を読むことで一時でも楽しい時間を過ごして貰うことであった。学生が非常に苦労して翻訳した絵本であるが、上述したように私の不手際で、著作権の許可が下りなかったものもあり、全冊を贈ることはできなかった。しかし、自分達の活動が単に学習に止まらず、遠く離れた海外でほんの少しでも誰かの役に立っているという経験は、学生達の達成感、充実感につながった。そしてこの活動を通して、世界の貧困問題、教育問題へと関心が深まり、さらには SDGs (持続可能な開発目標) にも目を向けるきっかけとなった。我々はとすると、自分の周り、自国のことにしか関心がなく、何か直接関わるきっかけがなければ、日常生活で世界の抱える大きな問題を意識することがない。大森 (2015) は絵本の可能性に

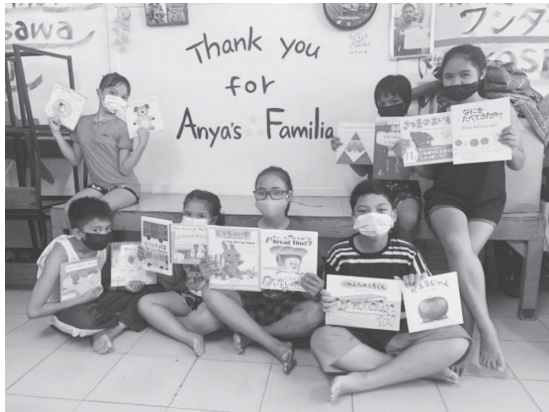


図1 寄贈した本を手にする
フィリピンの児童

ついて、絵本は読者を現実世界から離れた世界に引き込むことで、登場人物に寄り添い、自分事として課題を捉えることにより、現実世界では軽視されるような正義・平和・平等などに目を向けさせ、現実世界での変革に関わる持続可能な地域・社会観を育成し、行動に転化するエネルギーを生むと述べている。絵本の寄贈をきっかけに、寄贈先のフィリピンの子供たちと zoom で直接話す機会が生まれ、水道の蛇口をひねっても水が出ず、停電も多くあるというスラムの状況を目の当たりにすることができた。その時の学生の感想である。

- 私は、日本の絵本を翻訳してフィリピンに送った時、翻訳が本当に大変で嫌になりそうだったけど、フィリピンに届いて子供たちが自分の本を持って喜んでいるのを見て涙が出ました。今までボランティアをしたことがなかった私が絵本翻訳に参加できたことが嬉しく、また、子供たちに喜んでもらえたことも嬉しく思いました。
- 今日の zoom では、とても貴重なお話を聞くことが出来ました。子供たちはとても元気がよくて楽しそうに話していました。また、日本語もとても上手でした。話の中で、子供たちの遊びや暮らしを知って自分たちとの違いをとっても実感しました。しかし、そんな中でも子供たちなりに新しい遊びを工夫して見つけ出したり、大きな家族として毎日楽しく過ごしているとわかりました。私たちが送った絵本から、「もったいない」という言葉を知って使ってくれていたりしているのを見て、とてもうれしく感じました。また、直接関わりを持つことで以前よりも NGO などの取り組みや団体に興味がわきました。
- 海外の孤児たちと話す機会はなかなかないのでとても貴重な体験でした。何日も前から楽しみにしてくれていたと聞いて、もっとたくさん話して楽しませてあげたかったです。恥ずかしさと自信のなさでうまくいきませんでした。私は貧困問題や恵まれない子どもたちの問題に対して小さいころから興味を持っていて、Anyaさん（筆者注：NGOの代表者）の行っていることを私もしたいという気持ちがあります。このゼミに入ることを決めただけでも、子どもたちに絵本を送る活動に魅力を感じたからでした。小さいころからの夢だった活動を、ゼミを通して経験できていることに感謝しています。もっと英語を勉強して、言葉の壁を無くして子どもたちと関わりたいです。ぜひ、また機会があれば NGO との活動を行いたいです。子どもたちがおもちゃがないと言っていたのを聞いて、手作りおもちゃなどを届けてみたいと思いました。

7. 今後の展望

英語が専攻でない学生たちが英語を学ぶ意義は何であろうか。現代では技術の発達により英語を学習しなくても、即座に翻訳してくれるサイトや音声で通訳してくれる機器までが次々に誕生している。しかし、自身で翻訳してみて初めて気づかされることは多い。翻訳は母語と、ある言語の差異に気付かせてくれる最も有効な手段であり、その言語特有の物の捉え方、視点の違い等にまで目を開かせてくれ、複眼的思考を与えてくれる可能性を持っている。山本（2020）は、情報・事実を伝えることが主眼の実用テキストの翻訳はAIの発達で不要になるが、文学テキストの持つ、作品の持つ効果（喜怒哀楽、笑いなど）、作品の構造や仕掛け、文体的特徴等の文学的要素は、AI翻訳と相容れないものであると主張している。絵本という幼児向けに書かれた短いテキストも、れっきとした「文学テキスト」に他ならない。また英語を使って実際に世界と関わることで、学生は自分達の英語学習に意義を感じることができ、さらには学生にグローバルな視点を持たせることができると考える。次年度は、より焦点を絞り、SDGs 関連の絵本を取り上げることで、英語力増強とともに、SDGsについても知識を深めさせる活動に発展させることが課題である。

参考資料【英語に翻訳した絵本一覧】

- あいほらひろゆき（2013）『がんばれ！ルルマロ ママがおねつ』角川書店
あきやただし（2001）『たまごにいちちゃん』すずき出版
新井洋行（2018）『ふたをばかっ』KADOKAWA
いもとようこ（2002）『ありがとう』至光社
岩井俊雄（2008）『100かいだてのいえ』偕成社
岩井俊雄（2009）『ちか100かいだてのいえ』偕成社
岩井俊雄（2014）『うみの100かいだてのいえ』偕成社
いわむらがずお（1988）『もりのあかちゃん』至光社
かがくいひろし（2008）『だるまさんが』ブロンズ新社
かがくいひろし（2008）『だるまさんの』ブロンズ新社
かこさとし（1973）『からすのパン屋さん』偕成社
風木一人（2017）『たまごがあるよ』KADOKAWA
香山美子（1981）『どうぞのいす』ひさかたチャイルド
かんざわとしこ（1993）『たまごのあかちゃん』福音館書店
岸田衿子（1978）『なにをたべてきたの』佼成出版社
キヨノサチコ（1976）『あかんべノンタン』偕成社
小西英子（2012）『おべんとう』福音館書店
五味太郎（1982）『きんぎょがにげた』福音館書店
さとうめぐみ（2011）『ケーキちゃん』教育画劇
柴田ケイコ（2020）『パンどろぼう』KADOKAWA
島田ゆか（1995）『バムとケロのそらのたび』文溪堂
島田ゆか（1996）『バムとケロのさむいあさ』文溪堂

- 島田ゆか (2002) 『うちにかえったガラゴ』 文溪堂
 島田ゆか (2004) 『ぶーちゃんとおにいちゃん』 白泉社
 島田ゆか (2010) 『バムとケロのおかいもの』 文溪堂
 真珠まりこ (2008) 『もったいないばあさん』 講談社
 せなけいこ (1976) 『おばけのてんぷら』 ポプラ社
 せなけいこ (1969) 『ねないこだれだ』 福音館書店
 瀧村有子 (2007) 『ちょっとだけ』 福音館書店
 筒井頼子 (1977) 『はじめてのおつかい』 福音館書店
 tupera tupera (2010) 『やさいさん』 学研プラス
 tupera tupera (2011) 『さんかくサンタ』 絵本館
 tupera tupera (2013) 『いろいろバス』 大日本図書
 つるたあき (2020) 『かえるじゃん』 KADOKAWA
 中居正広、劇団ひとり他 (2020) 『ピンポンパンプー』 マガジンハウス
 なかえよしを (2007) 『ねずみくんのチョコッキ』 ポプラ社
 中川ひろたか (1995) 『さつまのおいも』 童心社
 中川ひろたか (1999) 『おおきくなるっていうことは』 童心社
 なかがわりえこ (1967) 『ぐりとぐら』 福音館書店
 なかがわりえこ (1967) 『ぐりとぐらのおきやくさま』 福音館書店
 なかがわりえこ (1967) 『そらいろのたね』 福音館書店
 なかやみわ (1999) 『そらまめくんのベッド』 福音館書店
 なかやみわ (2001) 『くれよんのくろくん』 童心社
 西巻茅子 (1969) 『わたしのワンピース』 こぐま社
 林明子 (1986) 『おつきさまこんばんは』 福音館書店
 林明子 (1989) 『こんとあき』 福音館書店
 松谷みよ子 (1967) 『いないいないばあ』 童心社
 わかやまけん (1972) 『しろくまちゃんのホットケーキ』 こぐま社
 ロロン (2017) 『うるしー』 ディスカバー 2 1

参考文献

- Sanders, E. F., 前田まゆみ (訳) (2016) 『翻訳できない世界のことば』 創元社
 Williams, L. (1988) *The Little Old Lady Who Wasn't Afraid of Anything*. Harper Collins.
 安藤貞雄 (1986) 『英語の論理・日本語の論理—対照言語学的研究』 大修館書店
 大森亨 (2015) 『環境教育/ESD 絵本試論』 創風社
 岡野恵 (2012) 「絵本翻訳演習がもたらす「ことば」の意識化—「英語コミュニケーション論 V」における実践からの考察—」『大正大学研究紀要』 97, 127-132
 ジョーデン・エリノア (1982) 「擬声語・擬態語と英語」『日英語比較講座第 4 巻 発想と表現』 (pp: 111-140) 大修館書店
 野原佳代子 (2014) 『ディスカッションから学ぶ翻訳学—トランスレーションスタディー

ズ入門』三省堂

灰島かり（2005）『絵本翻訳教室へようこそ』研究社

濱田英人（2016）『認知と言語 日本語の世界・英語の世界』開拓社

樋口万里子（2001）「日本語の時制表現と事態認知視点」『九州大学情報工学部紀要』14, 53-

81

牧野成一（2018）『日本語を翻訳すること』中央公論新社

山本史郎（2020）『翻訳の授業 東京大学最終講義』朝日新聞出版